

2020. 7. 26 (日) マタイ 21:23-27

21:23 それからイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」

21:24 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。

21:25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」すると彼らは論じ合った。「もし天からと言え、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。

21:26 だが、もし人から出たと言え、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」

21:27 そこで彼らはイエスに「分かりません」と答えた。イエスもまた、彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。

<説教>

主イエスは受難週には、昼間は都エルサレムに出て行き、夕方には都を出て（オリーブ山麓の村）ベタニアに行き、そこに泊まる生活を送られました。(21:17-18)

ルカ 21:37 には「こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。」と書かれています。

そして続けて「人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。」(ルカ 21:38)と書かれています。

「イエスが宮に入って教えておられ」(マタイ 21:23)たのは、そういう人々、群衆に対してでした。

すでにイエスは「宮」から「強盗」(21:13)を追い出しておられました。

今や「宮」はイエスの独擅場となり、神への「祈りの家」として、また神の「教え」の家としてイエスの主権のもとにありました。

しかしそんなことを知らない、認めない「祭司長たちや民の長老たち」が「イエスのもとに来」ました。

マルコやルカの福音書では、「律法学者たち」も加えられています。

つまり彼らはユダヤ人の宗教と政治の最高権力者たち、「最高法院（サンヘドリン）」(26:59)の一員でした。

彼らは自分たちこそが「宮」のすべての実権を握っていると思っており、「教え」の権威であると思っていました。

彼らは「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」とイエスを問い詰めました。

「これらのこと」とは「宮」の中で「教え」ることであり、遡って見れば「ダビデの子にホサナ」と子どもたちからの賛美を受けたことであり、目の見えない人たちや足の不自由な人たちを癒やしたことであり、「強盗」を追い出されたことです。

「あなたは、私たちが宮の中で働くことを許可した商売人たちを『強盗』呼ばわりし、

私たちの許可なしに勝手に追い出した。私たちの許可なしに宮の中で癒やしのわざを行った。私たちの許可なしに宮の中で子どもたちの賛美を受けた。私たちの許可なしに神の教えと言って宮の中で人々に教えた。大体あなたは律法について正式に学んではないだろうに。私たち（の仲間）の調べではあなたは悪霊につかれているということになっている。私たちの判断ではあなたには何の権威もない。一方、私たちにはあなたを問い詰める権威がある。そしてあなたを越権行為、また神冒瀆の罪に定める権威もあるのだ。」と「祭司長たちや民の長老たち」は自分たちの権威を誇示しつつイエスに迫ったのでした。(21:23)

それに対してイエスはお答えになりました。

21:24 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。

21:25a ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」

イエスのこのお答え自体が、「いやまずあなたが私たちの問いに答えなさい。」と言うような彼らの反論を許さない「権威」あるお言葉だったと思います。

イエスは彼らが自分で発した問いに、自分で考えて自分で結論を見出し自分で返答するように「権威」をもってお求めになりました。

「もしその計画や行動が人間から出たものなら、…しかし、もしそれが神から出たものなら、…」(使徒 5:38-39) という議論は律法の教師なら当然考えるはずのものでした。

もし彼らが本当にまともな教師であり、神の権威のもとにへりくだり、慎み深くあり、素直で正直であれば、“人のことを思わないで、神のことを思っている”のであれば、イエスの問いは答えるのに難しい質問ではありませんでした。

いやむしろ全く単純といってもいい質問でした。

しかし彼らの思いは、やはり神のことでなく人のことでした。

自分たちの面目、体面を保つこと、自分たちの地位や身分を守ることが彼らの目的の第一であり、すべてでした。

それは彼らが「論じ合った」こととその結果の彼らの答えからわかります。

21:25b すると彼らは論じ合った。「もし天からと言え、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。

21:26 だが、もし人から出たと言え、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」

ヨハネのバプテスマが「もし天からと言え、」どうなるか、と彼らは考えました。

彼らはもともとバプテスマのヨハネをも認めず、軽んじ、ヨハネの言うことを信じませんでした。

バプテスマのヨハネも彼らからすれば荒野に突然現れた野生人であり、やはり律法を正式に学んでもおらず、ユダヤ人の教師ではありませんでした。

彼らの中にはヨハネのバプテスマを形ばかり受けに行き、かえってヨハネから戒められた者たちも大勢いました。(マタイ 3 章)

「ヨハネが来て、食べもせず飲みもしないでいると、『この人は悪霊につかれている』と人々は言」うとイエスは言っておられました(マタイ 11:18) が、それは祭司長たちや律法学者たち、長老たちが言っていたことでもあったはずで。

「パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました」(ルカ 7:30) ともイエスは言っておられました。

そんな彼らが「もし天からと言えば」、当然イエスは「それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。」と彼らは考え、恐れしました。

そうならば大勢の民衆—彼らが日頃見下していた人々、また今やイエスの教えを聞いている人々の前で、そして宮の中で自分たちが大恥をかかされることになってしまいました。

そうならば彼らの威厳はがた落ち、面目丸つぶれです。

彼らにとってそんなことは絶対にあってはならないことでした。

でも、本当はそうになって、そこで彼らは、「ヨハネを信じなかった」故にヨハネが「私の後に来られる方」(ヨハネ 1:27)、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」(ヨハネ 1:29)と言って指し示したイエスを信じなかったことを認めて、悔い改めて、イエスを信じるようにでもなれば良かったのです。

しかし、彼らのプライドがそれを許さず、“今さら”そんな選択肢は彼らには考えられませんでした。

「もし天からと言えば」と言う彼らの思いの中には、バプテスマのヨハネを神から出た人だと認めざるを得ない、そう公言せざるを得ないという思いも見え隠れします。

言うならば“良心”の声です。

しかしその良心に従えば、「ヨハネを信じ」ることになり、そうならば続けてイエスが神から権威を授けられていることを認めなければならなくなることに彼らは気付いていました。

そうならば彼らの負けです(と彼らはかんがえました)。

イエスに公然と論争を挑んで来た手前、彼らは負けるわけにはいきませんでした。

それで彼らは良心の声をも無視して、闇に葬り去ってしまったのです。

では次に「もし人から出たと言えば」どうだと彼らは考えたでしょうか。

そうすると「群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者と思っているのだから。」と言うのでした。

不思議なことですが、ときに「律法を知らないこの群衆はのろわれている。」(ヨハネ 7:49) みたいに普段あれほど見下しているような民衆を「祭司長たちや民の長老たち」は恐れしましたのです。

それは、「ヨハネを預言者と思っている」つまり「天から出た」と思っている多くの人々の反発を買って、支持を失い、その結果自分たちの身分・地位が危うくなること、失われることを恐れたからでした。

「祭司長たちや民の長老たち」が一番に(そしていつも)考えていたことは自分(たち)のこと、自分たちの身の安全安心のことだけでした。

しかも神が怖いと言うのではなく「群衆が怖い」と言うのでした。

ヨハネの天からの権威を認めないことは神に逆らうことであるが故に神を怖れるというのではなく、「群衆」に逆らうことになるが故に群衆を怖れるというのでした。

彼らは神のことを思っておらず、神を恐れてもいませんでした。

彼らは「みな自分自身のことを求めている、イエス・キリストのことを求めてはいませ

ん」(ピリピ 2:21) でした。

また彼らは「ヨハネを預言者と思っている」という「群衆」の極めて真つ当な意見に耳を傾けようとしませんでした。

また、「群衆」の反発を買って、「群衆」から捨てられて、そうやって初めて神に立ち帰り、イエスに依り頼むという見通しも全くありませんでした。

「群衆」の支持を失ったら、人々から見捨てられたらもう一卷の終わりだと彼らはひたすら怖れていたのです。

一般民衆のことなど普段は見下しており、その声に耳を傾けようとしなくせに、自分たちの地位や利益を守るために民衆の支持は失いたくないというのが、宗教的であれ政治的であれ、この世の権力者たちの傲慢かつ惨めな姿なのです。

さてそのように「天から」とも言えず、さりとて「人から」とも言えなかった彼らは「分かりません」とイエスに答えました。(21:27a)

しかし「分かりません」という答えはごまかしであり偽りでした。

彼らは分からなかったのではなく、イエスの問いに責任ある応答をしなくなかったのです。

なぜならどちらの答えも答えたら最後、自分たちの不利益になると考えたからです。

「私たちはあなたに答えを言いません。言えません。言ってなるものか。」ということでした。

こうして彼らはイエスの要求を頑なに拒み、イエスを信じることを拒み、悔い改めることを拒んだのです。

ささやかな良心の声をも押し殺して、イエスの権威が神から来たことを頑なに認めようとせず、イエスご自身が権威であることを頑なに認めようとしませんでした。

それでイエスは、「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」と権威をもって彼らに言われたのです。(21:27b)

こうしてイエスは、「ヨハネのバプテスマは天から、即ち神から来て授けられた。それと同じように、わたしの権威も神から来た。神がわたしに権威をお授けになったのだ。いやそれ以上に、この私が神であり、権威そのものなのだ。」と彼らにお教えになったのです。

彼らはこの権威あるイエスの前に、自分たちの自己中心、頑なさ、ごまかしの姿勢を認めてへりくだり、イエスに信頼して悔い改めるべきでした。

考えてみれば、今まで見てきたような「祭司長たちや民の長老たち」の自己中心、頑なさ、ごまかしの姿勢はまた私たちの罪の傾向そのものでもあります。

そんな私たちを主はあわれみ、見捨てず、私たちのために十字架にかかり、三日目によみがえってくださいました。

そして今日も聖霊の宮である私たち一人一人に、そして教会にお入りになり、権威をもってみことばを語り、教えてくださいます。

私たちは、この今や「天においても地においても、すべての権威が与えられています」(マタイ 28:18) お方、主イエス・キリストを崇め賛美し、キリストのみことばに誠実に応答し、キリストの権威ある力によって支配され、助けられ、守られ、砕かれ、悔い改めつつ、キリストとともに永遠に生きるべく召されているのです。